



澤田公伸 [文]
ERIK LIONGOREN [写真]

フィリピン・南カマリネス州を訪ねて

小さな町の 大きな挑戦

島嶼国家フィリピンの中で最大のルソン島。その南部の幾重にもくびれた半島部分はビコール地方と呼ばれている。ここは米の産地として知られるほか、早くからカトリック信仰が根付き、今も多くの歴史ある教会が残されている場所でもある。また、唐辛子を使ったスパイシーな郷土料理も有名だ。

このビコール地方の中心地が、南カマリネス州の州都ナガ市である。毎年9月の第3週には、カトリックの有名な祭り「ペーニャフランシア祭り」が開かれ、全国から熱狂的なカトリック信者たちが集まるのがこの町だ。この信仰篤い町を訪ねてみよう、私はマニラから飛行機でナガへ向った。マニラから車で南下するという方法もあるが、ナガ市までの道は山越えの悪路が多く、9時間もの時間がかかる。飛行機だと45分ほどで着く。

ナガ空港に到着後、車でナガ市内に向かった。その道すがら、車窓から見えるイサログ山の雄姿に私の目は吸い寄せられた。休火山のイサログ山がもたらした肥沃な大地と豊かな水資源に恵まれた広大な穀倉地帯が眼前に広がっていた。山麓から続くなだらかな斜面に広がる田んぼのあちらこちらで

働く農民や水牛が米粒ほどに小さく見える。



スペイン人植民者が1579年に初めてこの地にたどり着いた時、住民たちはこの土地を「カマリツグ（穀倉地）」と呼んでいた。1636年にこの地は、スペイン人によって「バルティド・デ・イバロン」（現在の南カマリネス州の南部にあるアルバイ州以南のビコール地方）と「バルティド・デ・カマリネス」に分けられ、後者がさらに南カマリネス州と北カマリネス州に分けられて現在に至る。ナガ市は、スペイン本国の州名にちなみ「忠実なるヌエバ・カセレス」と名付けられ、アバカ（マニラ麻）やその他の農産物の流通拠点として、19世紀から20世紀前半まで栄えていた。

しかし、現在のナガ市中心部は、低

【写真上右】サンホセ町から見た夕日に染まるイサログ山
【同左】サント・ジョセフ教会正面にある守護聖人像



サンホセ町サバン港にあるモロ・タワーと
呼ばれる 17 世紀のスペイン時代の遺跡

い商業ビルや店舗が町の一角に並ぶだけの小さな町で、人口も15万人ほどとルソン島の他の都市に比べても少ない。ただ、市内や周辺の町にある教会はこの地の古い歴史を語ってくれる。車が国道を曲がり、隣のミラオール町に入ると、古い煉瓦作りの建造物が目に飛び込んできた。サント・ジョセフ教会だ。16世紀後半にこの地に建てられた修道院の跡地を利用した教会で、当時のたたずまいがそのまま残っている。とても静かな教会の前を歩いていると近くの消防署から消防隊員がつかつかと寄ってきて、「古い教会だろ。俺たちの消防車もすごい年代物なんだ」と30年以上も前のタイプと思われるオンボロ消防車を指差して笑っていた。

ボンボン町にあるボンボン教区教会も古い教会だ。ユニークなのはイタリアのピサの斜塔のように鐘楼が傾いていることだろう。年代を重ねるごとに傾いてきたのか、それとも設計上のミスで傾いていたのか誰にも分からない。子供たちはそんなことにお構いなく、傾いた鐘楼に上ったり、教会前の広場でかけっこしたりしていた。教会は、地元の子供たちにとっての格好の遊び場になっている。

ビコール地方の人たちは、神父が通りかかると敬意を込めて手を取り自分の額に付けて「お手を」の挨拶をする習慣があると聞いたことがある。ビコールには、篤き信仰が現在もなお息づいているようだ。

日本語で町おこし

こんなのかなどかなビコールの地方州で今、情報技術（IT）産業と日本語教育で「町おこし」を進めている名物知事がいると聞いた。そこで、私は教会巡りをした翌日、ナガ市から車で10分ほどのピリ町にある同州庁舎に行った。

その名物知事は、2年前に36歳の若さで南カマリネス州の知事に就任したルイス・レイムンド・ビリャフェルテ・ジュニア知事である。超多忙な知事を州庁舎の敷地内に最近完成したばかりの巨大な人口池を備えた大型ケーブル水上スキー場でつかまえることができた。この水上スキーは、池周辺の上空にワイヤーを張り巡らし、ケーブルにつないだハンドルをつかんで水上スキーを楽しむというもので、アジア最大の規模だそうだ。

同州政府は昨年4月に、州庁舎内の



【右】フィリピン国内で2番目となるケーブル水上スキー場の前に立つビリャフェルテ知事。2002年に同国で傑出した若者10人に贈られる賞を受賞した

【左頁上】ナガから車で20分ほどでボンボン教会に到着。周辺にはキバヨ教会など歴史ある教会が多い

【左頁下】首都圏ケソン市にある日本語教育振興財団『AKI財団』の支援で実現した日本語文化センターの授業風景

一部にIT産業に特化した特別経済区「南カマリネス情報技術パーク」（敷地面積5ヘクタール）を開業させている。フィリピン国内の自治体为主导して特別経済区を設置することは決して珍しくない。南カマリネス州でユニークなのは、日本語教育をその中心に据えていることだろう。

「日本は米国と並んで最も進んだ国で、アジアの隣国でもあり、心理的に我々には近い。それに日本は最近、人口が減ってきているので、人材が欲しいはず。我が州では毎年9000人近くも大卒者を輩出しており、優秀な若い労働人口が豊富。日本語やIT技術、介護技術などを教えれば即戦力としてすぐに働けるでしょう」

ビリャフェルテ知事は、立板に水の如く早口でこう話した。

「日本の温泉地など観光地を視察したことがあります。我が州も観光開発すれば日本人ビジネスマンや退職者を呼び寄せられると思っています」

元実業家らしいアイデアと自信に満ちた態度は頼もしい。このビコール地方は長年、米やアバカ、ココナッツなどの農産物や、鉱山資源だけに頼ってきた。毎年、雨期には、ビコール地





方東部の海上で発生する台風に直撃され、農産物が壊滅的被害を受け、貧困に喘いできた場所でもある。それだけにこの町おこしに新しい活路を見いだそうとしているのだろう。

IT経済区にある日本語教育の現場を訪ねてみると、まだまばらにしか建物がない経済区の一画に南カマリネス州日本語文化センターの白い建物があった。ここでは常時、日本人教師3人が駐在し、300人近い若者が日本語を学習している。州政府の奨学金などを受けて勉強できる制度もあり、生徒たちの表情はみな真剣そのものだ。

教師の一人によると、「昨年12月の



日本語能力試験で3級、4級に合格した生徒20人ほどが日系企業などにすぐに採用されたのが、良い刺激になったみたいだ」という。これだけの規模の日本語学習者を抱える学校は、フィリピン国内でもそう多くはない。知事のフレッシュで熱い改革精神が徐々にビコールの若者たちの意識に浸透しているようだ。

リゾートへの夢

南カマリネス州東端のカラモアン半島の沿岸にあるアギリナガン島まで行ってみることにした。ピリ町にある州庁舎からイサログ山を左に見ながら車で東に走ること約1時間、サンホセ町にあるサバン港に着いた。

港のすぐ近くにビコール地域で最も古いというモロ・タワーとよばれる遺跡があった。スペイン植民地時代に、主にミンダナオ地方に住んでいたモロと呼ばれるイスラム教徒が海賊となつて、ビコール地方の海岸の村々を頻繁に襲撃し、カトリック教徒たちを連れ去つたといわれる。モロ・タワーはその見張り台だったところだ。

サバンの港は貧しい漁師町で、大き



な店なども見当たらない。近くにいた漁師に聞くと、最近ではダイナマイト漁や台湾などの外国漁船の違法操業が横行し、水揚げ量ははずめの涙ほどだという。しかし、子供たちは明るい私に気がつくとも、どこからともなく現れ、すぐに黒山の人だかりとなった。

サバンの港からバンカー船で海上を東に1時間ほど疾走すると、目的地のアギラナガン島が見えてきた。ぽつかりと海上に浮かんだ小島の周りに白砂のビーチが弧を描いて広がっている。ビコール地方にこんなきれいなビーチがあつたのかと驚かされた。島に店や宿泊施設などはほとんどない。観光客もほとんど訪れないこの島の素朴な自然はなかなか味わい深いものがあつた。

南カマリネス州は今、IT産業と日本語教育のほかに観光開発にも力を入れており、このカラモアン半島の尖端の地域では、外国人観光客が多く集まるフィリピン有数のリゾート地・ボラカイ島を目標に「ボラカイ級のビーチリゾートを！」との掛け声のもと、すでにリゾート開発が進められている。この「町おこし」は、この国の貧しい地域にとって貧困脱却への一つのモデルになるかもしれない。 ■



【右頁上】少女が差し出しているのはビコと呼ばれる餅菓子。餅米とキャッサバ、ココナツミルクを使いこんがり焼く
 【右頁下】カラモアン半島からサバン港に戻るバンカー船
 【左頁上】カラモアン半島沿岸に浮かぶアギラナガン島。この辺りの海では早朝によくイルカの群れが見られるという
 【左頁下】サバン港にいた子供たち。父親が漁で不在中、母親と一緒に餅菓子などを作って行商する子供もいた